

論文要旨

目的：切迫早産治療後の妊婦が、自宅療養生活での困難感や抱えている思い、その要因に関する研究は未だ進んでいない。本研究は、妊娠中に切迫早産治療のため3週間以上、子宮収縮抑制剤の点滴と安静を行っていた褥婦に対して、退院後の自宅療養生活での困難や抱えている思いを明らかにすることを目的とした。

方法：関東近郊の2施設より協力を得た。研究協力者は3名で、経産婦2名と初産婦1名であった。半構造的面接法により得られた内容を質的記述的に分析し、個別にデータ化し分析を行った。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(No. 17A-077)。

結果：2カ月半の長期入院となったA氏は、【児の障害・リスクへの不安】を強く感じていたが、退院が決定したことで【児がもう生まれても良いことが確実になった安心感】を得た一方で、【急な分娩開始への対処に対する不安】を感じた。退院後は【さみしい思いをさせていた上の子に全力で応えたいという気持ち】があるものの、【3食の食事の準備の難しさ】や【体力・筋力の著しい低下】により【上の子への対応と家事の両立のジレンマ】が生じた。また、改めて【家で安静にするのは困難】であると感じた。

第1子、第2子ともに切迫早産にて入院となったB氏は、【無事に児を産めるかという強い不安】が【早産になったらそれは自分の責任という思い】につながり、分娩終了時までプレッシャーを感じた。そのため退院が決定した際には、【家で安静にできるかという不安】があったが、一方で【出産前に家に帰って気持ちをリセットしたい】というポジティブな思いもあった。退院後は【体力・筋力の低下による動作の辛さ】を感じたが、【家族に子供・家事を任せられる】ことで負担軽減できた。

妊娠中、2度の入退院を経験したC氏は、1度目の入院時は【周囲に申し訳ないという気持ち】や【児の生死が危うい状態である怖さと不安】があったが、退院すると、【出来ることはやりたいと張り切った気持ち】になった。しかし、自宅では【筋力低下による階段の昇り降りや歩行の辛さ】や【どこにも行けず思うようにならないもどかしさ】、【また入院しなきゃいけないのかという危機感】も生じた。2度目の入院時は【再入院の残念さ】があったが、NSTで張りを確認すると【お腹が張ることへの不安】を生じ、【退院に向けての喜びと不安】を感じた。退院後は【著しい体力の低下によるしんどさ】から【体力をつけないとお産を乗り越えられるか不安】になった。また、【家の環境で安静にする難しさ】を感じた。さらに【予期せず分娩が始まってしまう不安】や【分娩に対する恐怖】もあった。

結論：切迫早産の妊婦は、退院後の自宅療養生活で支援・準備不足による困難感を生じていた。よって、入院中から安静を保ちながら自宅での過ごし方の相談を行うことなど、自宅療養の不安を解消できる方法を共に検討することが必要である。